

自然と一致した生き方は善、と考える者は多い。そうだろうが必ずしも明るいわけではない。自然にあれほど感応した宮沢賢治。「グスコー・ブドリの伝記」や「銀河鉄道の夜」が生み出される以前、十代半ば作の短歌の暗さは実に印象的だ。

「なにのために ものをくふらん そらは熱病 馬はほふられわれは脳病」、「尾根に來れば そらも疾みたり うろこぐも 薄明穹の発疹チブス」。我(地)と空(自然)が合一した神秘的な陰鬱。なるほど、賢治作品の底には、少年期からの陰鬱が響いているのだな。

「生きているのは、もはやわたしではない。キリストがわたしの内に生きている(ガラテヤ 2:20a)」。ここで生きている私と、キリストが分かちがたく共にある状態。これは、感覚なのか、思弁なのか、目標なのか。人間と自然が分かちがたいように、私たちはキリストと分かちがたくあるのだろうか。

「わたしが今、肉において生きているのは、わたしを愛し、わたしのために身を献げられた神の子に対する信仰によるもの(2:20b)」。

今、この地において、この身のまま、キリストが私の内に生きているその現実、何によって成り立っているのか。「わたしのために身を献げられた神の子」の十字架によって。これが揺るぎない真実。

そして、御自分を放り出してまで十字架にかかり、私をなんとか助けよう(救おう)とされているその真実を受け入れる「信仰」という姿勢で、私たちは「生きていく」。

「お前の主なる神はお前のただ中におられ、勇士であって勝利を与えられる(ゼファニヤ 3:17a)」。

預言者が告げた神との合一のごとく、パウロは「キリストがわたしの内に生きている(ガラテヤ 2:20a)」真実を語った。

それでは「神はお前のただ中におられる」ということは、人間という生命は自然の内では生きているという意味なのか。違う、神は「お前たち」ではなく、「お前」と相互におられるのだから。

「主はお前のゆえに喜び楽しみ、愛によってお前を豊かにし、お前のゆえに喜びの歌をもって楽しまれる(ゼファニヤ 3:17b)」。

えっ、何だって、神は「私によって喜び楽しむ」のか、「私のゆえに喜びの歌をうたう」のか。あふれる「愛によって私を豊かに」して下さることは分かる。だが、宇宙を創造された神が、一喜一憂されるほどに、私と一つになっておられるとは、なんと畏れ多いことか。

陰鬱ではあるが、宮沢賢治の自然感応力は、預言者に近いのかもしれない。「尾根に來れば そらも疾みたり うろこぐも 薄明穹の発疹チブス」。

さまざまな地上の苦しみを、「そらも」負って「疾んでいる」。しかしそれでも、ぼんやりしたまま。救いの焦点は、この「私」において像を結んでいない。

「キリストがわたしの内に生きている(ガラテヤ 2:20a)」。どのような姿でか。

「わたしは、キリストと共に十字架につけられている(2:19)」。「わたしを愛し、わたしのために身を献げられた(2:20b)」その十字架に、私も共につけられている。

気楽な、得した気分の合一ではない。十字架なのだから。私が十字架へ赴いたのではなく、キリストが傍らに来て「私の十字架」を負って下さっている(マルコ 8:34~37)。

「生きているのはもはやわたしではない。キリストがわたしの内に生きている(ガラテヤ 2:20a)」キリストと一つになっている私。十字架ゆえに、値高い私を安くしてはならぬ。値切られてもいけない。



《おまけのひとこと》

それぞれに負っている十字架 大きさ重さに段差があるかと思えても 遠近の違いだけではないか
キリストは私の命で今も生き 骨董品のような古さや希少性はなく ただ個別に 必要なだけ重い